

養護教諭部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして

研究の経過

平成16年度から10年間、「健康について考え、自分らしく生きていくことができる子どもの育成をめざして」という研究主題で研究し実践をしてきた。

子どもたちの健康課題は、ますます複雑で多様化している。養護教諭の特性を生かした養護実践を継承しつつ、さらに深め発信していくことが重要であるとおさえた。その課題解決に向けて平成26年度から新たな研究主題を設定し研究を深めてきた。28年度は3年次目の研究となる。

2. 主題設定の理由

近年の少子高齢化、核家族化の進行や、情報化の進展など社会環境の急激な変化は、児童生徒の心身の健康に大きな影響を与え、生活習慣や環境に起因する疾患やアレルギー性疾患、新たな感染症の増加など、健康課題を多様化させている。同時に、人間関係の希薄化、幼少期に経験することが望まれる様々な体験の機会の減少は、他者への関心や信頼感を育てる大切な機会をも減少させ、人とのコミュニケーションをとることがうまくできない子どもたちの増加につながっているように思われる。

子どもたちの健康課題には、その背景に自己肯定感や自尊感情の低さが存在することが少なくない。このように複雑で変化の激しい社会において、私たちは、子どもたちの自己肯定感・自尊感情を高め、自分自身も他者をも大切にできる子どもを育てたいと考える。それをもとに健康に関心を持ち、考え、主体的に判断し、自らの目標に向かって生き方を選択・追求できる力をもった子どもを育てたい。そのためには、養護教諭として、子どもたち一人ひとりを大切に受容し、職務の特性を生かした実践をとおして具体的な対応や支援のあり方を探求することが重要と考える。

以上のように、複雑かつ多様化した子どもたちの健康課題に対し養護教諭の視点を大切にしたい取組が必要と考え、標記の研究主題を設定した。

3. 研究内容

<研究内容1>

子どもたちの実態を把握し、問題点を明確にする。

<研究内容2>

子どもたちが自己肯定感を持ち、自分らしい選択をし、人とのつながりを大切にしながら生きていけるよう、支援のあり方を検討する。

<研究内容3>

保健室で気がついた子どもたちの実態について、教職員・家庭・社会にどのように発信・連携していくのか、その方法を検討する。

4. 研究方法

- (1) 会員一人ひとりの日常実践に基づいた市町村ブロックの共同研究を推進し、成果と課題を明らかにする。
- (2) 理論研修会や実技研修会を開催し、日常実践や今日的な課題解明に役立てる。
- (3) 部会・ブロック情報やホームページを通して会員及びブロックの交流を図り、研究に関する情報の充実に努める。

Ⅱ. 研究の経過と成果

1. 全体の実践の経過

(1) 役員研修会・推進委員研修会の内容

- 4月12日 今年度の業務・研究計画の確認
- 5月19日 研究協議会・次年度研究計画について
- 7月7日 研究協議会・実技研について
- 9月15日 研究協議会・ブロック研究レポートについて
- 2月20日 研究協議会反省・研究活動の反省・次年度へ向けて

- ・ ブロック情報・部会情報の発行
- ・ 推進委員研修会ごとのブロック交流
- ・ 部会HPの更新

(2) 実技研修会

8月25日(木) 石狩教育研修センター

「色弱者の見え方を体験しよう」 ～多様な色覚を持つ子どもたちの理解と学校でできること～

講師 有限会社 ソノーク代表取締役 栗田 マサキ 氏

(3) 第二次研究協議会

10月14日(金) 恵庭市立若草小学校

- ・ レポート発表
- ・ 分科会 (保健室小・保健室中・救急処置・アレルギー・小規模校)
- ・ 掲示物交流
- ・ 理論研修会 「思春期における性同一性障害」

～性同一性障害についての理解と学校での対応について～

講師 北海道文教大学 作業療法学科 教授 池田 官司 氏

2. 各ブロックの研究と成果

<石狩ブロック>

1. 研究主題

子どもとつむぐ 心かよわす保健室づくり

～効果的な執務をめざして～

2. 研究の内容

昨年度までの執務の交流から、多忙な学校現場において大勢の子ども達が様々な理由で、保健室を訪れている中で正確な情報の共有ができているのか、それぞれが自分たちの執務の在り方を模索していることに注目し研究を行った。

①健康診断グループ・・・実施要領や事前・事後措置や検診時の時間の流れなど多岐について交流した。

②掲示物グループ・・・子ども達が足をとめる、効果的な掲示物について持ち寄り交流した。

③記録用紙小学校グループ・・・来室や問診記録、衣服の貸し出し時のカードなどについて交流した。

④記録用紙中学校グループ・・・それぞれの記録の仕方について交流した。

それぞれのグループで交流した中で、情報の共有をすることで子どもの理解を深め、スムーズな組織としての連携や多くの人に関わることで多面的な支援の在り方を求め、実践していることがわかった。

3. 研究の成果と課題

心かよう温かな保健室づくりを求めて、子ども達のためにしてあげたいこと、伝えたいことを損ねないための手段や、工夫を豊富な資料等で交流できた。子どもと保健室、その関係づくりのための見通しをもった意図的な発信を形にしていこうと、取り組んでいきたいと考える。

＜恵庭ブロック＞

1. 研究主題

自分のからだと向き合い、自ら選択表現できる子どもの育成をめざして
～執務の見直しを通して～

2. 研究の内容

学校保健にかかわる新たな健康施策を学習し、養護教諭としてもつべき視点について、テーマを絞って全体で検討し、交流してきた。

食物アレルギー対応については、昨年交流した内容をもう一度振り返り、それぞれが実践してきたことを交流した。

また、今年、学校保健安全法施行規則の一部が改正になったことから、「児童生徒の健康診断マニュアル」を分析し、養護教諭のもつべき視点を検討・交流した。健康診断や保健調査は、誰のため何のためのものなのか、プライバシーに十分配慮するとはどういうことなのかなど、意見を交流し合い、これからも統一できるところを整理し、実践に役立てていきたい。

3. 研究の成果と課題

学校保健にかかわる新たな健康施策を学習していくことで、養護教諭として、どんな視点をもって執務にあたるかを原点に戻って見直すきっかけになった。これら交流・学習した視点を健康診断や保健調査、日常の執務に反映させていきたい。

「食物アレルギー対応」については、「恵庭市の対応マニュアル」策定が（案）のまま停滞している状況である。今後策定が進むなかで、交流してきた視点をもって意見を反映させていきたい。

＜北広島ブロック＞

1. 研究主題

健康について考え判断し、行動できる子をめざして
～保健室での対応を通して～

2. 研究の経過と成果

子どもたちにどんな健康課題について考え判断し、行動できるようになって欲しいかを焦点化し、「生活リズム」と「携帯・スマートフォン」の2グループに分かれて3ヶ年計画でこのテーマに迫ってきた。

「生活リズムグループ」では、口腔班と生活リズム班に分かれ、保健だよりと掲示物を同時に提示したり、シリーズ化した保健だよりを拡大してラミネートをかけ、保健室での指導に活用したりした。

「携帯・スマートフォングループ」では小学校と中学校に分かれて、依存症について取り組んだ。小学校では保護者用・職員用資料を作成し、興味を持ったり意識してもらったりし、中学校では生徒用資料を作成して、保健室に置いて生徒の反応を検証した。

また、それぞれの研究を交流して情報を共有し、依存症については理論研修会で学習した。

3. 研究のまとめと今後の方向

それぞれが課題と考えることについて、時間をかけて研究することができた。

「生活リズムグループ」の作った保健だよりや掲示物の資料は、他の学校でもすぐに活用できるものとなった。また、依存症については、まだ情報が少なくわかっていないことが多いので、理論研修会で手稲溪仁会病院の白坂知彦医師からご講演いただく予定になっている。

来年度からは新しい研究テーマになる。主題に迫る課題を設定して、執務にいかせる研究を進めていきたい。

＜千歳ブロック＞

1. 研究主題

自分のからだと向き合い、主体的に生きていく子どもの育成をめざして

2. 研究内容

法改正に伴い今年度変更された「健康診断項目」、昨年度より導入された「校務支援システム」「フッ化物洗口」、各地の自然災害を受けて「災害時の安全、保健室の役割」について学習の必要性を感じ、ひとつひとつについて学習を深めた。部会員が互いに講師となり、またパネルディスカッション形式の学習会も行い、子どもが主体的に考え行動できるようにするためにどのように実践していけばよいのかを各校が見直し、検討した。

また、理論研修会では収納アドバイザーを講師に招き、「保健室の機能を高める整理術」について研修した。安全面に配慮しているか、緊急時を想定しているか、4月に誰が来ても即戦力として使える保健室か、など整理収納のポイントを研修することができた。

3. 研究の成果と課題

昨年度から今年度にかけて、学校保健分野に次々と新しい動きがあった。それを受け、ひとつひとつを部会員全体のなかで学習し、共通理解を図ることができた。校種や規模により、めざす目標や取り組む方法に違いがあっても、子どもの立場で考え、主体的に行動できる子どもの育成を意識していきたいと考える。次年度は、今年度の学習や見直しを生かして保健行事や日常執務について計画し、実践する。

＜江別ブロック＞

1. 研究主題

「自分のからだと向き合い、自ら考え行動できる子どもの育成をめざして」
～支援のあり方を通して～

2. 研究の内容

食物アレルギーについて「配慮を要する児童生徒グループ」「救急処置グループ」「相談活動・保健室支援グループ」の3グループにおいて、昨年度整理されたそれぞれの課題を検討し、実践に結びつけるために学習を深めた。

具体的には、アレルギーの調査表についての検証、緊急時マニュアル及びアレルギー対応医療機関マップの作成、保護者・児童生徒への啓発資料の作成を行った。

3. 研究の成果と課題

昨年度に引き続き研究をすすめることで、課題の解決や今後の見通しを持つことができた。3グループで研究することによって、幅広い内容に取り組むことができた。

今後は、グループの実践内容を全体のものとし、食物アレルギーのある児童生徒と周囲の児童生徒が共に生き共に育つ「共生共育」のとりくみをすすめていきたい。そのために必要な手立てと具体的な発信について、さらに研究を深めながら、実践結果の検証・評価を行い、次年度へとつなげていきたい。

＜当別・新篠津ブロック＞

1. 研究主題

健康について考え、自分らしくすこやかに生きる子どもの育成をめざして
～執務の見直しを通して～

2. 研究内容

昨年度末、執務についての実践交流をしたいという声があがったことから、今年度は養護教諭の執務に焦点をあて、各校の実践を交流してきた。

①健康診断：今年度から必須項目となった四肢の状態の検診をどのように実施したか、また、プライバシーへの配慮における工夫点などについて交流した。また、健康診断票と健康カードの様式が実情に合わないことから、実施項目に合わせることを大前提に使いやすさや見やすさについても2町村の様式を見比べながら改善に向けて検討した。

②フッ化物洗口：当別町で今年度から中学1年生においても実施されるようになり、各校での実施方法について話し合う中で、子どもたちの健康と安全を守れるかといった課題や疑問が多く出された。

③理論研（10月21日） 『発達障害の子どもの理解について』

新篠津村スクールカウンセラー 藤澤 麻弥子 氏

3. 研究の成果と課題

当別町・新篠津村に複数配置校はないため、養護教諭は1校に一人の存在である。他校の実践を知ること、新たな発見や気づきを確認し合えたことは有意義であった。特に健康診断に関しては、施設・設備的にすぐに自校に取り入れることが難しいこともあるが、内容によっては予算確保や手間を惜しまなければどの学校でもできることがあると確認できた。今後もテーマをしぼり交流を深めることで、自校の執務を見直し、改善・向上につなげていきたい。

3. 研修会の成果

(1) 実技研修会

研修の中では、色のシミュレーターというアプリや眼鏡、特殊なライトを使って、色弱の方の見え方も体験でき、大変有意義な研修となった。また、『色弱は治るものではなく特性であること、違いでも異常でもなく、多数派か少数派か、もしくは多様性である』という栗田先生のお言葉を聞き、改めて今後、色のバリアフリー化が進み、色覚特性のある方が、一層暮らしやすい社会になることを願いながら、私たちもまずは学校現場でできることを考えて実践いきたいという思いを強くした。



(2) 理論研修会

研修を通して、性同一性障害についての理解が少しずつは進んできたものの、まだまだ社会には偏見や差別もあり、性別違和を感じている子どもたちが大きな不安やマイナスの感情を抱えている実情があることを改めて痛感した。実際私たちがどのように関わっていけばよいのか難しさも感じた。しかし、性同一性障害の方たちの思いを知り、自尊感情を育んでいけるような関わりを持つことが大切であるということを知ることができた。

IV. 第二次研究協議会分科会討議より

<保健室（小）①②>

- ・アレルギーの対応は、各校の実態に応じ研修を取り入れるなど、学校全体に周知した中で連携をとりながら進められていた。
- ・保健室登校や不登校傾向の児童の対応は、担外の先生方と連携し、チームで取り組むことが大切である。教職員への発信の仕方・全体へのつなげ方について今後も交流を深めていきたい。

<保健室（中）①②>

- ・新たに導入されたばかりの健康診断項目は、学校医や地教委にとっても扱いが難しく、今後も子どもにとって意義のあるものとなるよう取り組みを続ける必要がある。
- ・色覚検査については、廃止された理由を深く受け止め、色覚特性のある子どもたちが安心して学校生活を送れるよう色のバリアフリー化を進めていく必要がある。



<小規模校>

- ・小規模校は、農業や漁業、ホテル勤務の家の子どもが多く、両親ともに朝早くから夜遅くまで働いている家庭が多いため、孤食となってしまったり、朝食を食べてこない子どもがいることから食の指導で改善を試みている。
- ・家から学校までの距離が遠く、バス通学やタクシー通学となり、体力低下や肥満傾向の子どもが多く、運動不足解消に取り組んでいる。

<救急処置①②>

- ・事例の交流の中で、受診病院情報交換ができた。
- ・緊急時の体制づくりには、年度末反省で、学校としての視点から根拠を持って提案し、認識してもらうことが大切である。
- ・受診させるか否かの判断に迷う時は、養護教諭としての根拠に基づいて判断することの大切さを認識できた。

<アレルギー>

- ・各市町村の実態交流を通して、アレルギー対応の中で課題と感じていることを共有するとともに、今後取り組んでいくときの参考になる情報を交換できた。
- ・重症アレルギー児童については、プライバシー保護の観点や保護者・本人の思いに十分留意した上で、教職員だけでなく、児童生徒や関係機関とも情報共有をして対応に当たることも考えていく必要があることがわかった。
- ・栄養教諭配置校は、給食のアレルギー対応を栄養教諭に頼ってしまっている部分もある。養護教諭として危機感を持ち、担任をはじめとする教員への働きかけ、代替食の確認などを日常的に行っていく必要がある。

V. 部会研究の成果と課題

1. 成果

「健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして」の研究主題のもと、各ブロックが具体化した主題を設定し、研究を推進することで、より研究主題に近づく研究につながった。

また、法改正に伴い今年度変更された「健康診断項目」など、学校保健にかかわる新たな健康施策の学習を深め、養護教諭のもつべき視点から検討・交流することができた。

理論・実技研修会においては、色覚特性や性同一性障害などを正しく理解し、今、学校でできること・すべきことについて考える良い機会となった。

2. 課題

次年度以降もこれまでの研究を深めていけるよう、各ブロックで研究主題でさらに具体化した研究を進めていかななくてはならない。そのために、研修会や研究協議会、おたより、ホームページなど、各ブロックが交流できる場所や時間をさらに有効活用し、全体での情報の共有や連携を努めていきたい。